戦争は「何の顔」をしているのか

Northern Lights における「女性の声」の役割を考える

田吹　香子

1．序

本発表では「冷戦は文学の中でいかに描かれるか？冷戦における戦う主体、戦う行為とは？」という問いを主に据え、Tim O'Brien の *Northern Lights* における戦争の「当事者」としての女性の声の役割について考察した。

本作は元々冷戦を描く物語として捉えられてはいないが、キューバ危機や核シェルター、男性生殖器に核爆弾が及ぼす悪影響や、戦争は現実味がなかったが、その背景で何かのスピードが増している(*Northern Lights* 20-21, 以下本作からの引用は頁数のみを付す)との語り手の言葉により、そこには冷戦の「空気」が通底すると言える。その中で主人公 Paul Milton Perry や弟 Harvey ら男性には見られない「女性の長いおしゃべり」は、物語の中盤から後半に集中して不自然に配置される。Paul に対する彼女らの独白めいた語りについて、Farrell は「Paul の祖父の代から続く寡黙な忍耐といった男性的慣習」の対極をなす母親的なもの(207)と述べる、本作を冷戦の物語だと定義すれば、それは社会から逸脱する Paul を戻す女性たちの冷戦の「当事者」の語りであり「戦い」とすることは可能だと考える。

2．冷戦と女性

De Hart によれば、冷戦下アメリカ国内においては、男性以上に女性は母として、そして家庭の管理者として、国防と国際的な平和に貢献する能力があるとされ(*Rethinking,* 110)、「安全の場」である家庭を作り、その中で緊張や絶望を和らげることを求められた。政治的には、女性は共産圏、特に当時のソビエト連邦との「文化的背景で戦われるイデオロギー的闘争」(May 19)に打ち勝たねばならず、その性的役割は家庭内に封じ込められ、彼女らが夫や男児の性的逸脱を防ぐ役割をになった(*Rethinking*,124-26)。さらに、近代的生活の中で計画的に複数の子供を持つことが戦闘で死ぬ兵士の「補充」の生産だという認識も暗に存在した(May 25-26)。つまり、女性は「戦い、産む性」という複雑な立場にあり、冷戦下では「戦う行為」だと見做されたことが分かる。

3．逸脱する男性、食い止める「シェヘラザード」たち

だが、物語では Paul は「アメリカ的男らしさ」と冷戦下の男性の役割を放棄する。彼は幼少時から父に「男らしさ」を要求されるが、以前溺れた Pliney's Pond には未だ入れず、Harvey のようにベトナム戦争でヒロイズムを獲得することもない。また、キューバ危機勃発時弟は核シェルターを作るが、彼は料理や父の介護といった家庭的作業に終始し、スキー・トレックでは「ジャガイモを取ろうとしゃがみ込む女性のように」(220)火を起こし、「ベッドサイドの母親の様に」(243) 肺炎になった弟を世話すると描写される。加えて、彼は冷戦下の理想的家族をも拒否する。職を失い breadwinner としての役割を失うが動揺もせず、妻とは子を作ろうとしない。さらに、ネイティブ・アメリカンの子孫とされ、共同体とは一歩離れた Addie に心を寄せる事実からは、家庭のみならず社会からも逸脱したいという衝動すら読み解けよう。

このような Paul を冷戦下の「正常」な状態へと戻すのが妻 Grace、山裾で遭遇する幼い女の子、そして幼子と同名の母親 Carla の「長いおしゃべり」だ。まず、Grace の「おしゃべり」では性行為に応じない夫に対して、町の噂や自らの胸の大きさ、子を持つこと等が長々と「尋問をするかのようにささやかれる」(128)。Cordle は、これは子をもうけたいという彼女の家庭内のナラティブでしかない(*Suspense* 78)とするが、一方で、夫が雪山での冒険に出る前にこの発話がなされることを考慮すれば、これはシェヘラザードの寝物語にも似た、Paul の自然への逃避を阻止するイデオロギー的語りかけだと解釈できる。つまり、この語りかけは自らの女性・妻・母という政治的役割を彼に刷り込み、同時に彼を社会につなぎ止める為の「冷戦を戦う主体の声」なのだ。また、雪山をさまよう Paul は幼い女の子に遭遇するが、彼女は片言で一方的に話し続ける。この未熟な、しかし長い「おしゃべり」の役割は、Farrell の指摘す

る通り、自然と文明の分岐点で彼を止める(209)ということであり、家に向かう時名前を尋ね彼に「Paul だ」(292)と答えさせるのは、この幼子が男を社会に戻し、行為遂行的に自らを命名しなおす契機を与える行為なのだ。さらに、母親 Carla は「おしゃべり」により彼が心身共に男性として社会に戻る機会を与える。長い独白を通して彼女は彼を風呂に入らせるが、Farrell が述べる通りそれは家庭生活と文明に彼が戻る為の洗礼的儀式(209)であり、加えて、Paul に現在地や家への帰り方等を伝えることから、社会に彼を戻す道しるべの役割をも果たすと言える。また、Smith は Carla との「性的関係を彷彿とさせる場面は、Paul が以前とは異なる人間として社会に戻る前のリハーサルのようだ」(51)と論じるが、更に掘り下げれば彼女は冷戦社会の理想的な男性の立場へと Paul を導く役割も担うとも考えられよう。

4. 幻想へと誘う「声」－非当事者から当事者へ

この後、Paul は町に戻ったことから、女性達の「声」はひとまず彼を社会に戻す役割を果たしたことになる。しかし、実際は彼がこれらの女性達の政治的誘導を全て素直に受け入れたとは言えない。例えば、彼は女達の長い独白を遮りはしないが、それは寡黙な忍耐という男性的行為ではなく、むしろ当時アメリカ市民の間にはびこった、核戦争の恐怖から生まれる「無関心や社会を拒絶する姿勢」(Mandelbaum 214) の表れだと言える。また、帰宅後、Paul は妻に対し「愛情と温かい家庭と子供がほしくて、平穏も愛すべき夫も手に入れたいなら[…]忍耐強くなることだ」(317)と言い、ベッドの中で彼女が「おしゃべり」を始めると、「そのいらつくささやきは止めてくれ」(346) とあからさまに嫌悪を示す。

では、なぜ彼は最終的に Grace と子をもうけ、家庭を作る決意をするのか。その答えはタイトルの northern lights の描写と池に入る場面にあるだろう。彼は Grace を拒絶した後、Pliney's Pond へ赴くが、そこに出ている北極光は「空を急上昇し、揺れ動き、垂直に落ちてゆく赤い色 (“the rocketing, wavering, plummeting red in the sky” [347])」と描写される。しかし、オーロラとも呼ばれる北極光がゆらゆらと空に漂うものだとすれば、むしろこの「急上昇する」、「垂直に落ちる」、そして「赤い色」という言葉は核爆弾の発射とそれに伴う炎を暗示すると考える方が妥当だ。実際、この後彼は「恐怖と思い出しかない」(347)自らの世界に終止符を打とうと池に入るが、反対にその中で彼は「生物の息吹、母性、子宮、血液、受精する前の卵子」など、死と対局にあるものに触れ、それらを意識する。そして、池から上がり上空の「壮大な光(“the great lights”)」を目の当たりにすると、厳格な父の終末論の下ではなく Grace という「より安心できる幻想」(348) の下で生きようと考える。これらの描写から、池での行為は Paul が冷戦下で生き方を変える為の最終的な洗礼的儀式だと解釈することができる。事実、この直後、Paul は家に帰るとすぐに Grace と交わり「これで妊娠しただろう」(351)と確信を持つ。その率直な言葉には自らの性的不能を乗り越えた自信や Grace と子を持つ喜びは見られない。むしろ、父の気配が残る家を売り妻と別の町で新生活を始めると決意する描写からは、冷戦下における女性達の声に促されイデオロギー的核家族を作る方を選んだことが露呈する。このように、一見バランスを欠いた「長いおしゃべり」に映る女性たちの「声」は核爆弾と冷戦の時代を表す北極光へと彼を導き、社会への適応を促す機能を持つのだ。

【引用文献】

Cordle, Daniel. *States of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism, and United States Fiction and Prose*. Manchester: Manchester UP, 2008.

Farrell, Susan. *Critical Companion to Tim O'Brien*. New York: Facts on File, 2011.

Kuznick, Peter J. and James Gilbert, ed. *Rethinking Cold War Culture*. Washington: Smithsonian Books, 2010.

Mandelbaum, Michael. *The Nuclear Revolution: International Politics before and after Hiroshima*. Cambridge; Cambridge UP, 1981.

May, Elaine T. *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era*. New York: Basic Books, 2008.

O'Brien, Tim. *Northern Lights*. Broadway books: New York, 1975.

Smith, Patrick A. *Tim O'Brien: A Critical Companion*. Westport: Greenwood, 2005.